

教員志望の大学生におけるハンドボール授業の展開について

— 体育学科3年生を対象として —

About the development of handball lesson in the teacher training school students

— A study of third-graders enrolled in the department of physical education —

体育学部体育学科

和所 泰史

WASHO, Yasushi

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

キーワード：ハンドボール, 教師, 指導, ゴール型

要約：本報告は、教員採用試験合格を目指す体育学科3年生の学生に対して、ハンドボールを授業教材として扱う際の注意点や教員採用試験に出題が予想される問題を教授しながら90分の授業を展開し、授業後にアンケートを実施したものである。これまでのハンドボール経験については「全くない」が65%、授業のみで経験が31%、専門競技としているが4%であった。勉強になった技能、ルールとしては、「ドリブル」「退場（2分間退場）」「オーバーステップ（4歩以上歩く）」「ランニングシュート」「ラインの名称」という順に多かった。教員採用試験の合格を目指し、今後教員となるためには、指導者が正しいルール、技能を認識し、授業を展開する必要があると再確認できた。

1. はじめに

ハンドボールには「走る・跳ぶ・投げる」の異なる重要な運動要素が含まれており、ボディークンタクト（身体接触）も許されていることから「球技の格闘技」と言われるほど、ハードな競技である。ハンドボールは球技の「ゴール型」に属しており、シュートに至るまで選手たちは動きながら多彩なパスを手で自由に行い、シュートチャンスをうかがう。競技は2チームの対戦型で行われ、1人のゴールキーパーと最大6人のコートプレイヤーが同時にコートにいてもよい。交代は自由である。競技時間は成年、高校生の場合、前後半30分ずつが標準で、その間10分の休憩がある。試合は相手チームのゴールにボールを投げ入れ、一定時間にあげた得点の多いチームが勝者となる。

ハンドボールは日本ハンドボール協会(2013)¹⁾によると「1922(大正11)年7月24日、当時東京高等師範学校の教官であった大谷武一が東京代々木で開催された日本体育学会夏期講習会で紹介したことが始まり」とされている。この時の参会者は中等学校・小学校の教師と青年団の指導員合わせて約100人ほどで

あった。注目度は学校教育面で高く、1926(大正15)年5月には文部省(当時)の改正学校体操教授要目で中学校、男子実業学校、師範学校男女の第2学年の新教材として配当された。さらに、1936(昭和11)年6月改正では高等小学校、高等女学校、女子実業学校(4・5年生)の教材に追加され、学校体育としてのハンドボールは着実な歩みを見せた。また、翌1937(昭和12)年に日本国内で初の公式戦(関東選手権)が開催され、さらに翌1938(昭和13)年に日本送球協会が創立された。この日本送球協会は1948(昭和23)年に日本ハンドボール協会へと呼称を変更し、現在に至る。

当時のハンドボールは屋外の11人制であったが、同じく日本ハンドボール協会(2013)²⁾によると1957(昭和32)年に女子が初の世界7人制選手権を行ったことで、徐々に7人制への移行が始まる。同年に日本も女子と中学生はすべて7人制で行うことを決定し、1963(昭和38)年には男子も7人制一本化が決まったことで、すべての国内試合を7人制で行うこととなった。こうして屋外の11人制であったハンドボールは屋内の7人制へ移行していく。

現在の学習指導要領において、ハンドボールはゴール型競技の1種目となっている。土井(2006)³⁾はハンドボールの機能的特性(生徒から見た運動の魅力)について「ハンドボール特有の技術や戦術を個人及び集団で駆使して攻防を繰り返し、得点を取り合って勝敗を競い合う楽しい運動」であることや「技能や体力の向上にともなうゲームの質的高まり(深まり)に楽しさを味わうことができる運動」でもある。また、構造的特性(運動独自の技術的構造やルールなど)として、ハンドボールは「攻守入り乱れ型」であり、チームが一定の時間、空間、ルールの下で戦術や作戦を駆使して得点を競い合うという構造をもっている。最後に効果的特性(運動が心身におよぼす影響)として、ハンドボールは「ゲームや練習を通して集団的技能や個人的技能を高めるとともに、体力や運動技能の向上を図ることができる運動」である。また「練習やゲームを通してリーダーシップを発揮したり、互いに助け合い、協力しながらゲーム運営に参画することによって社会生活に必要な態度の育成に資する」といったものもあげられる。

2. 研究のねらいおよび目的

本研究の目的は、将来的に教員を目指す大学3年生の学生に対して、ハンドボールを授業教材として扱う際の注意点や教員採用試験に出題が予想される問題を教授し、さらにハンドボールの認知度を調査したものである。また、本研究の結果を明らかにすることで、今後、学校現場におけるハンドボール指導の参考になることがねらいである。

日本のハンドボール競技人口は決して多いとは言えない。令和元年度の全国高等学校体育連盟の加盟・登録状況を確認したところ、高校生の所属部活動の人数は、同じゴール型競技のサッカーは173,388人(男子162,397人、女子10,991人)、バスケットボールは143,656人(男子87,524人、女子56,132人)に対してハンドボールは42,633人(男子26,717人、女子15,916人)となっている(全国高等学校体育連盟, 2020)⁴⁾。なお、この差は中学校になるとさらに広がる。令和元年度の日本中学校体育連盟の加盟・登録人数を確認したところ、中学生の所属部活動の人数は、サッカーは193,602人(男子187,708人、女子5,894人)、バスケットボールは289,389人(男子160,190人、女子129,199人)に比べて、ハンドボールは27,678人(男子16,794人、女子10,884人)となっている(日本中学校体育連

盟, 2020)⁵⁾。

しかし、ハンドボールは学習指導要領に組み込まれていることから、中学校、高等学校の専門教科として教員採用試験において出題される可能性のある競技であり、教育現場に就いた際には生徒に対して指導することもあり得る。小学校においても体育(ボール遊び)のゴール型競技としてハンドボールは出題される可能性があり、教育現場においても体育のボール遊びからラグハンドボール、そして競技としてのハンドボールにまで段階的指導を行うことがある。そのため、教員志望の学生にハンドボールを指導することは、教員採用試験の対策になるのみならず、将来教育者としてハンドボール特有の魅力や教材価値を生徒に伝えることにも役立つと考えられる。

3. 研究対象及び研究方法

本報告は教員採用試験合格を目指すK大学体育学科3年生の学生に対して、ハンドボールを授業教材として扱う際の注意点や教員採用試験に出題が予想される問題を教授しながら90分の授業を展開したものである。受講学生の数は2020年10月20日に25名、2020年10月27日に26名の合計51名であった。学生には事前課題として、2020年4月より日本ハンドボール協会が公式YouTubeで掲載している「ルール動画」を視聴させた。動画は「魅力・特徴編」⁶⁾「ルール入門編」⁷⁾「ポジション編」⁸⁾「ルール上級編」⁹⁾の4本があり、各動画の時間は3分~4分である。

学生には屋外のハンドボールコートで授業を実施させ、『2021年度版 教員採用試験 中高保健体育らくらくマスター』¹⁰⁾と『教員採用試験対策 オープンセサミシリーズ 専門教科 中学・高校 保健体育』¹¹⁾のハンドボールに関するページを印刷し、学生に配布した。学生にはハンドボール用語を解説しながら実践を行うことで、より深く理解ができるような授業を展開した。なお、筆者はハンドボールの競技歴と指導歴をともに有している。

学生には授業後に、教員を目指すうえでの希望校種、ハンドボール経験、ハンドボールの授業を受けて勉強になった技能、ルールを最大5つまで選ぶ、および授業レポートを提出させた。結果は、51名中、48名の有効回答(94%)があった。

本報告では、この回答結果から、現在の大学生のハンドボールに関する実施度、習熟度などを明確にし、今後、ハンドボールを学習教材として取り入れる際の

注意点や指導方法の参考資料となれば幸いである。また、教師が正しい知識を身につけることは、技術や戦術、作戦の名称を知り、それらをゲーム中に適切に発揮することを理解させるうえで必要となる。

21世紀の社会は新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代が予想されている。こうした知識を育んだうえで、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが重要であり、教師が正しい知識を身につけたうえでハンドボールの技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解させ、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにすることが必要である。

4. 研究結果

K大学体育学科3年生が10月末時点で教員を希望している学生のうち、希望校種は小学校希望が12人(25%)、中学校(保健体育)希望が13人(27%)、高等学校(保健体育)希望が23人(48%)と高等学校(保健体育)が最も多い結果となった。

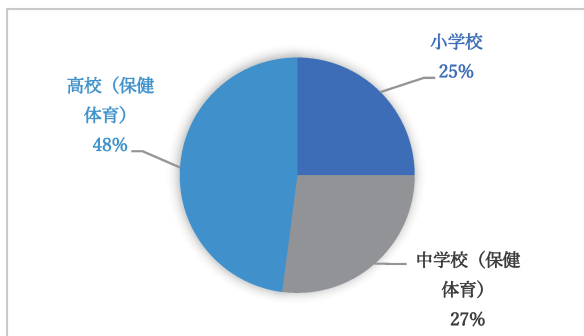


図1. あなたの希望校種は何ですか？

次の問いはハンドボール経験である。ハンドボールをこれまで授業で経験したことがあるか、もしくは専門競技としているかを聞いたところ、ハンドボール経験が「全くない」と回答した学生は31人(65%)、「中学校、高校、大学の授業のみで経験したことがある」が15人(31%)、「過去、もしくは現在ハンドボール部に所属している」が2人(4%)となった。

K大学の体育学科では教員免許取得のための実技種目としてハンドボールも選択必修科目の1つとしているが、ハンドボールに関しては教員志望、すなわち教員免許取得を目指す学生でも選択しないということである。これは現在の大学生のハンドボール競技に関する興味・関心ともいえるデータであろう。なお、K大

学の体育学科の学生は小学校を希望校種(小学校免許取得を目指す)としている場合でも、保健体育の教員免許は必須となっている。

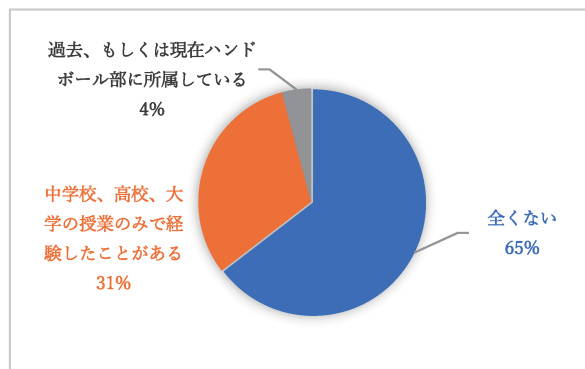


図2. あなたのハンドボール経験を教えてください

次に、ハンドボールの授業を受けて勉強になった技能、ルールを選ぶものである。この項目は最大5つまで選択可とした。なお、この項目は前述した教員採用試験対策の本に掲載されている技能やルールから選んだものである。

表1. ハンドボールの授業を受けて勉強になった技能、ルールを選んでください。(最大5つまで)

ショルダー(オーバーハンド)パス
ラテラル(リスト)パス
フックパス
バックパス
ステップシュート
ランニングシュート
ブラインドシュート
ジャンプシュート
スカイプレー
ドリブル
試合人数
試合時間
スローオフ(試合開始)
コート的大小
ラインの名称
フリースロー
オーバーステップ(4歩以上歩く)
オーバータイム(3秒以上保持する)
ダブルドリブル(ドリブルした後、再びドリブルをする)
ホールディング(相手を捕まえる)
プッシング(相手を突き飛ばす)
キックボール(膝から下でボールを扱う)
ハッシュプレー(攻撃せずに進行を遅らせる)
7mスロー
退場(2分間退場)
警告
特になし

結果は以下の通りとなった(図3)。最も勉強になったと回答した技能、ルールは「ドリブル」で

ある。48人のうち、29人（60％）が勉強になったと回答している。次に「退場（2分間退場）」が17人（35％）、次いで「オーバーステップ（4歩以上歩く）」「ラインの名称」が14人

（29％）でという結果であった。

この結果はハンドボール経験が未経験である人が多いこともあるが、未経験の人が勉強になった点と比例した結果となっている。ハンドボール未経験者31

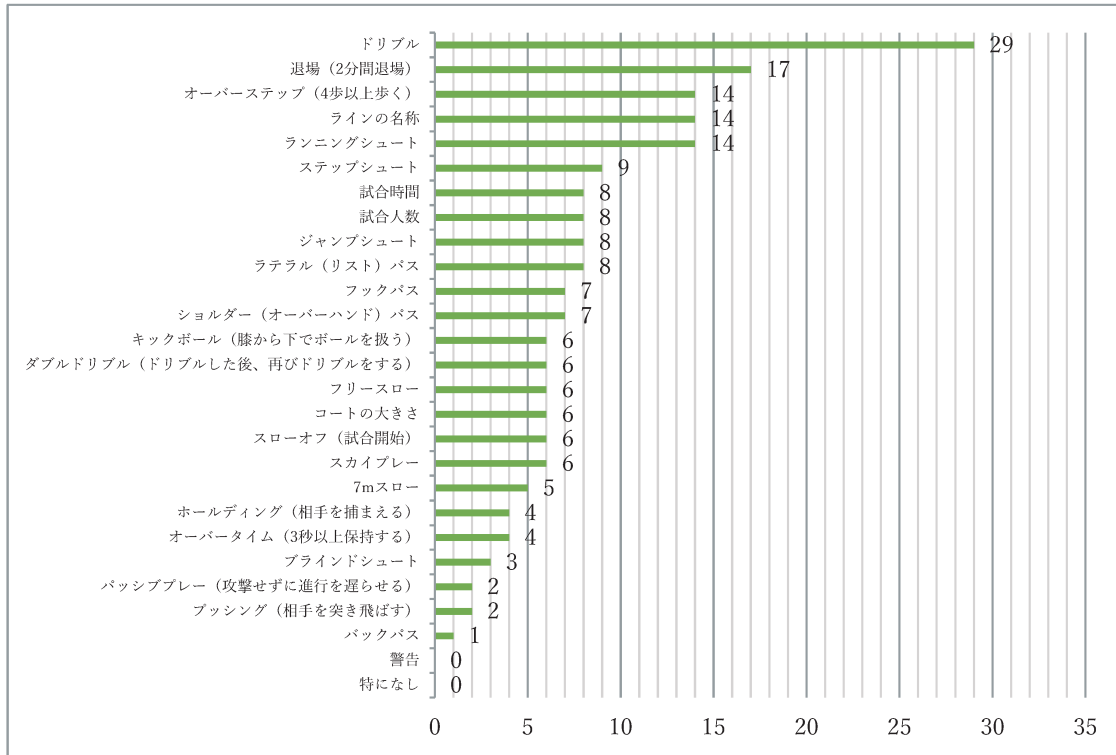


図3. ハンドボールの授業を受けて勉強になった技能, ルール

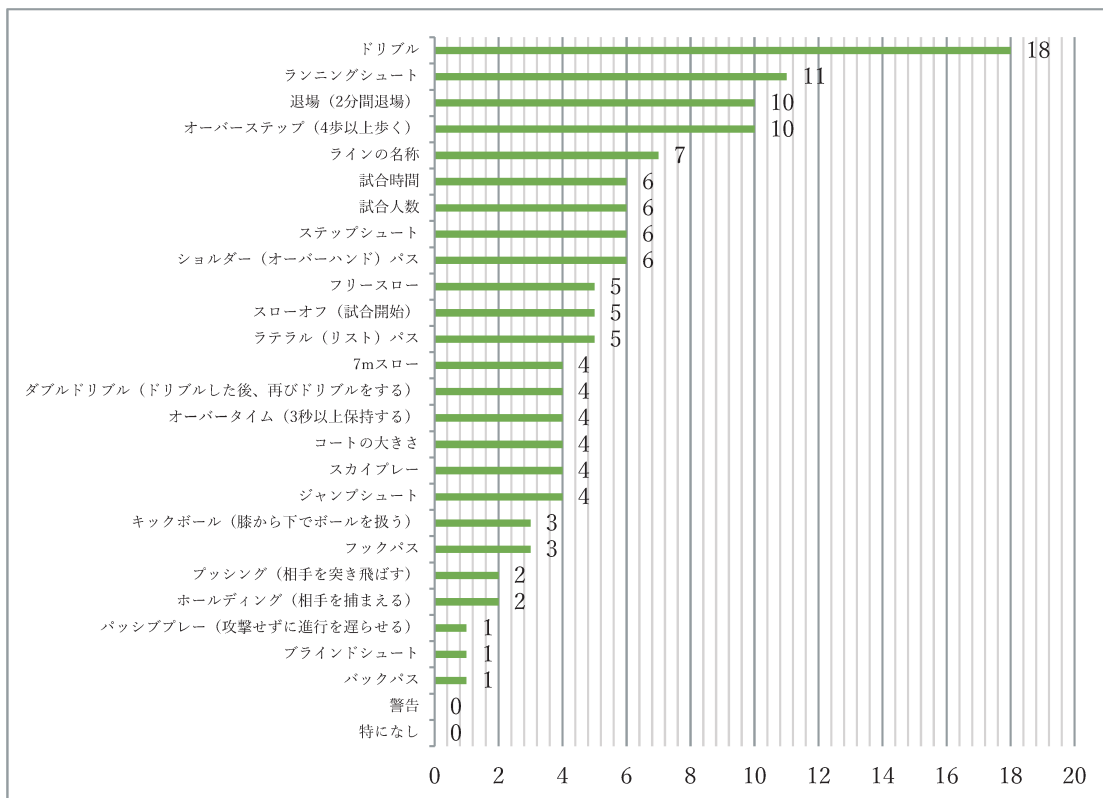


図4. ハンドボール未経験者が勉強になった技能, ルール

人のうち、最も勉強になったと答えた技能・ルールは「ドリブル」の18人（58%）と全体の1位と同じであった。次は「ランニングシュート」の11人（35%）、続いて「退場（2分間退場）」と「オーバーステップ（4歩以上歩く）」の10人（32%）、そしてラインの名称が7人（23%）となった。

一方でハンドボールを「中学校、高校、大学の授業のみで経験したことがある」と答えた15人のうち、勉強になったと答えた技能、ルールも「ドリブル」であった。「ドリブル」の回答者は11人（73%）である。この割合は全体およびハンドボール未経験者よりも多い。すなわち、これはハンドボールを授業などで経験しているものの、正しい知識を指導してもらえなかったと言えるだろう。続いて「退場（2分間退場）」が7人（46%）、「ラインの名称」が6人（40%）、「オーバーステップ（4歩以上歩く）」「ジャンプシュート」の4人（26%）であった。

最後に「過去、もしくは現在ハンドボール部に所属している」と答えた学生は2人いた。2人がハンドボールの授業を受けて勉強になった技能、ルールについては、2人とも「フックパス」と答えており、そのうち1人はラインの名称とも答えていた。

では、以下に本報告の結果からハンドボール指導における重要点や注意点を述べていきたい。

4.1 ドリブルの指導

『ハンドボール競技規則2020年版』¹²⁾の「第7条 ボールの扱い方、パッシブプレー」において「7の4立っているとき、あるいは走っているときのボールの扱い方」では、「(a) ボールを一度はずませ、再び片手または両手でつかむこと。(b) 片手でボールを繰り返し床にはずませ（ドリブル）、その後に片手または両手でつかむこと、あるいは拾い上げること。(c) 片手でボールを繰り返し床の上で転がし、その後に片手または両手でつかむこと、あるいは拾い上げること。その後は、（片手または両手でボールをつかんだ瞬間から）3歩以内かつ3秒以内にボールを離さなければならない」と記載されている。

この競技規則を見る限り、ハンドボールにおける正しいドリブル方法についての記載がない。また、この競技規則にはイリーガルドリブル（ダブルドリブル）の審判のジェスチャーは記載されているものの、具体

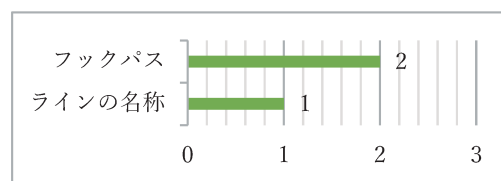


図6. 「過去、もしくは現在ハンドボール部に所属している」と答えた学生が勉強になった技能、ルール

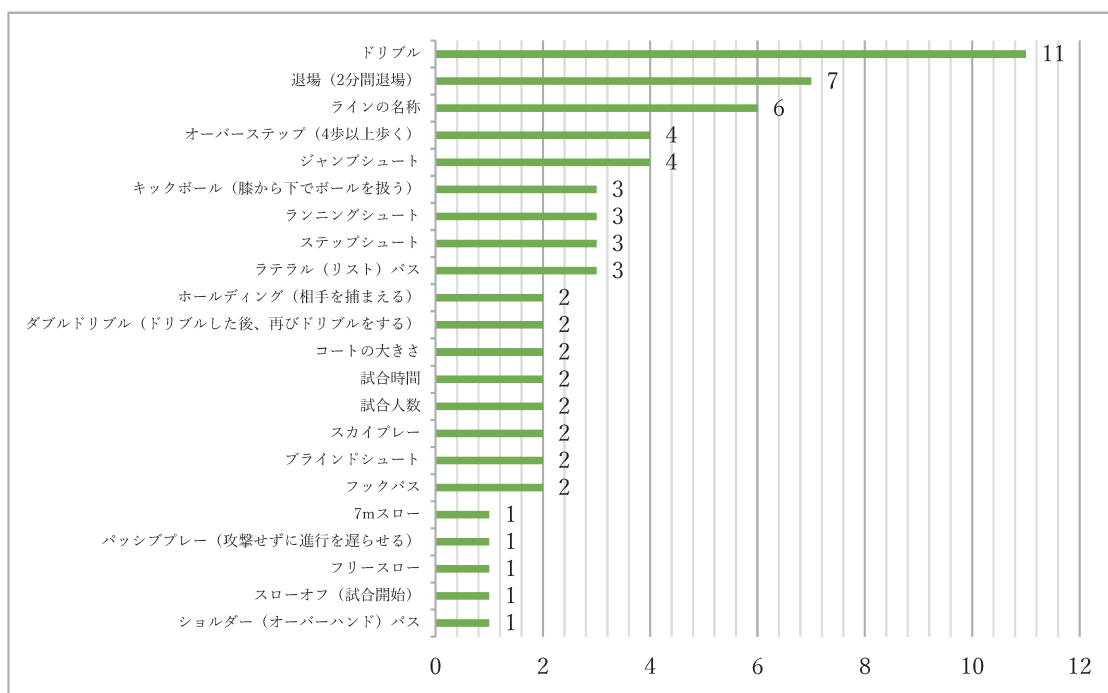


図5. 「中学校、高校、大学の授業のみでハンドボールを経験したことがある」と答えた学生が勉強になった技能、ルール

例などの明記がされていないため、ハンドボールにおける正しいドリブル方法が理解できない。

ハンドボールのドリブルはバスケットボールと異なり、ボールを手で巻き込むようないわゆるボールの側面を持つドリブルは保持したものと判断されるためイリーガルドリブル（ダブルドリブル）となる¹³⁾。

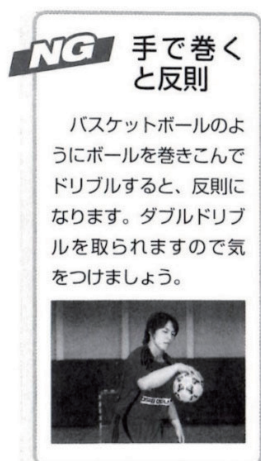


図7. ハンドボールのドリブルの注意点
(宮崎大輔『ハンドボールパーフェクトマスター』)

しかし、このドリブル方法を知らない学生が非常に多かったため、本報告の結果からドリブルが勉強になったと答えた学生が多かったと思われる。なお、筆者が確認したところ『図説 新中学校体育実技』(2018)¹⁴⁾、『中学校体育実技』(2018)¹⁵⁾ といった実技書にも記載がなかった。

前述したように、ハンドボールのドリブルはボールを巻き込む、すなわち手首を使い手のひらを返すようなドリブルも反則となるため、バスケットボール以上に制約がかかる。しかし、本報告で確認したところ、ハンドボール未経験者のみならず、中学校、高校、大学の授業のみでハンドボールを経験したことがある学生も正しいドリブル方法を認識していなかったと考えられる。これは、中学校、高校、大学の授業においても指導者が正しい知識を習得しておらず、ハンドボールの指導を行っていたということであり、大きな問題点であると言えるだろう。

このドリブルのルールが日本において、いつ認識されるようになったかは正確ではない。的場 (1959)¹⁶⁾ はハンドボールの7人制ドリブルの方法および11人制に比べた制約を「1. 両手でのタッチはつかんだとみなされる。2. 片手の場合は、ボールが手の中にある、シュート・モーションなりパスの動作などで空中で動作が一たん停止した状態であれば、つかんだとみ

なすことになっている」と述べている。しかし7人制が主流となり、同じく的場 (1966)¹⁷⁾ はドリブルでボールをつかんだか、つかんでないかの限界について「a 片手ドリブルの後両手でタッチすれば、両手で2回ドリブルできないから、つかんだとみなすことになる。b ドリブル中またはドリブル後、空中でいったんボールが停止の状態にあれば、つかんだとみなすことになってしまう」と述べている。このルールにおいて空中での停止を述べていることから、この時期から現行のようにバスケットボールでの手を返すようなドリブルは禁止になっているものと考えられるだろう。

4.2 退場（2分間退場）について

ハンドボールの競技規則「第16条 罰則」について「退場」の16の3「次の場合は、退場（2分間）とする」と記載されており、退場（2分間）の違反行為が書かれている¹⁸⁾。ハンドボールにおいて、この退場者が出た場合は、チームはコート上のプレーヤーを2分間1名減らさなければならない。このルールが他の競技では見かけない独特のものであることから、勉強になったと回答した学生が多かったとみられる。例えばバスケットボールにおいてプレーヤーの5回目のファウルを犯した場合には、それ以後、そのゲームに加わることができない。しかし、コート上のプレーヤーを減らす必要はない。また、サッカーにおいてはプレーヤーが警告であるイエローカードが2枚重なるか、もしくは危険な罰則を犯した場合には、いきなり退場であるレッドカードが出される。この場合、プレーヤーは2度とコートに戻れず、残り時間もチームはコート上のプレーヤーが1名減った状態となる。

このように競技人口の多い同じゴール型球技のバスケットボールやサッカーの退場は認識している学生はいたものの、ハンドボールにおける退場（2分間）や失格といったルールは認識していなかったため勉強になったと回答した学生が多かったのであろう。このハンドボールの退場（2分間）は、ハンドボールの魅力伝える1つのルールとも言える。

4.3 オーバーステップの指導について

ハンドボールの競技規則¹⁹⁾ では「第7条 ボールの扱い方」において、「7の3 ボールを持って最高3歩まで動くこと」については許される行為とある。すなわち、ハンドボールは最高3歩までの動くことは許されており、ボールを持ったまま4歩以上動いた場合は「オーバーステップ」という反則行為となって相手

ボールとなる。一方で「ドリブルからのステップの開始（7：3）」(p.91)には次のようである。『競技規則7：3のc, dにあるように、ジャンプして空中で「ボールを受けた」後の最初の着地は一步とは数えない（0歩）が、「ボールを受ける」とは、パスを受けることを意味する。』この規則にあるように、ハンドボールは味方からのパスを空中でキャッチし、両足もしくは片足で着地すればステップはまだ0歩で、そこから3歩使ってプレーすることができる。すなわち、味方のパス後のボールを持った状態では、ハンドボールは4歩までの動作が認められているのである。その後、自らドリブルをした後の歩数については同じ競技規則によると次のように書かれている。『ジャンプして空中にいてもドリブル後のボールをキャッチするという行為は上記の「ボールを受ける」に該当しない。したがって、ドリブルの後、片足を地面につければ例外なく（0歩とはせず）第1歩と数える。』すなわち、ドリブル後は0歩が適用されないため、3歩までとなる。筆者は、この歩数をオーバーステップの指導時に説明したことから、オーバーステップが勉強になったと回答した学生が多かったと思われる。

近年、バスケットボールにおいては2017年10月1日施行のFIBA（国際バスケットボール連盟）競技規則に沿った新ルールとして2018年4月1日よりJBA（日本バスケットボール協会）競技規則²⁰⁾では「動きながら、足がフロアについた状態でボールをキャッチしたり、ドリブルを終えた場合、フロアについている足の次にフロアについた足を1歩目とし、その足がピポットフットとなる」と新たに規定された。この規定によりバスケットボールにおいても0ステップが採用されたが、ハンドボールにおいては従来から0ステップが採用されていた。指導者は、この0ステップの指導をハンドボールにおいてもきちんと理解し、取り入れることが、重要になるとと思われる。

4.4 ラインの名称について

ハンドボールには他競技と同じく様々なラインの名称がある。その中でもサッカーと共通している名称が「ゴールライン」である。しかし、サッカーのゴールラインはゴールのある横幅全てをゴールラインと呼ぶが、図8のように、ハンドボールのゴールラインはゴールの中だけという限られた幅となる。ハンドボールにおいてゴールより横の幅は「アウターゴールライン」という名称で、ハンドボール以外では聞くことのない名称である。

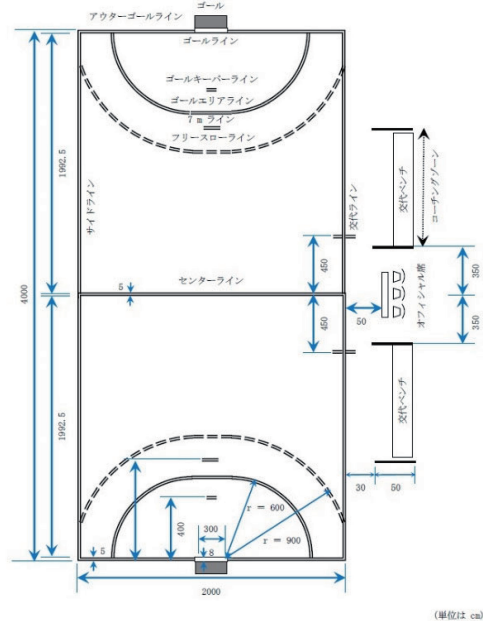


図8. ハンドボールのコート

(日本ハンドボール協会『ハンドボール競技規則2020年度版』)

また、ゴールキーパー以外が侵入できない「ゴールエリアライン」やフリースローを実施する際に必要な「フリースローライン」がある。フリースローは相手チームのフリースローラインの内側からフリースローを行うことはできない。このように、ハンドボールにおいては「ゴールライン」「アウターゴールライン」「ゴールエリアライン」と、「ゴール」の言葉が入るラインが3つ存在する。筆者はこの点を繰り返して説明したことから、ラインの名称が印象に残った学生が多かったと思われる。

4.5 ランニングシュートの指導

ハンドボールでは様々なシュートが存在する。筆者は、その中でも教員採用試験に出題される可能性のある「ステップシュート」「ランニングシュート」「ジャンプシュート」を説明し、実施させた。また「ブラインドシュート」と「スカイプレー」の説明も行った。これら5つの技能の中でも「ランニングシュート」が勉強になったと回答している学生が多かった。そのため、ランニングシュートの習得が難しかったと思われる。

ランニングシュートはその名の通り、走りながらシュートを打つものである。スポーツイベント・ハンドボール編集部（2014）²¹⁾によると、ステップシュートと異なる点は逆足（右利きならば右足）が前に放つことが多い。また、ステップシュートと異なり、唐突

に打つシュートなので相手のディフェンダーやゴールキーパーが対応に遅れやすい。また、ステップシュートよりもディフェンダーに近い位置でボールをリリースすることができる。



図9. ランニングシュート

(スポーツイベント・ハンドボール編集部『ハンドボール 目からウロコのシュート術』)

筆者はランニングシュートの技能習得を目指す中で、利き手と同じ足を前に出してシュートを打つように指導した。しかし、この技能習得が困難であった学生が多いようであった。全体(48人)で「ランニングシュート」が勉強になったと回答していた学生は14人(29%)であったが、ハンドボール未経験者(31人)になると11人(35%)と割合が上がる。一方でハンドボールを中学校、高校、大学の授業のみで経験したことがあると答えた学生(15人)では3人(20%)に過ぎない。そのため、ハンドボール未経験者ほどランニングシュートの技能習得に時間がかかると思われる。そのため、指導者はシュートの中でもランニングシュートへの時間をかけるといいだろう。

4.6 フックパスの指導について

今回のアンケートでは2名の学生が「過去、もしくは現在ハンドボール部に所属している」と答えた学生であった。その2名がともに「ハンドボールの授業を受けて勉強になった技能、ルール」で回答した技能が「フックパス」である。フックパスは、今回の授業で配布した資料の『2021年度版 教員採用試験 中高保健体育らくらくマスター』¹⁰⁾で技能として掲載されていたため、指導を行った。フックパスとは体の後ろ側から、手首のスナップを使って投げる技である。酒巻(2012)によると「バスケットボールのフックシュー

トと同じ要領で、DFの頭越しに放物線を描いて落とすパスで、腕は脱力して、肩を大きく回しながら、最後は手首を柔らかく使って“ボールを抜く”という感覚が重要²²⁾と述べている。



腕や手首の力は抜いて、ふわりとボールを落とすだけでいい

図10. フックパス

(酒巻清治『ハンドボール練習メニュー200：基本が身につく』)

このフックパスという技能は、ハンドボールを専門競技としている学生でも知らなかったと回答している。そのため、ハンドボールを専門競技としていても教員採用試験では普段使わないような知らない技やルールが出題されることがあるため、教授する必要がある。

5. 考察およびまとめ

本報告の結果として、ハンドボールは保健体育の学習指導要領のゴール型競技として含まれているのにも関わらず、将来教員志望である大学3年生の経験が少ないことが明らかとなった。本研究の結果、ハンドボールを中学校から大学まで通して未経験であった学生は65%もいたのである。これはハンドボールを指導できる教員と学生のハンドボールに対する興味を示していると言えるだろう。

また、ハンドボール未経験者と中学校、高校、大学の授業のみでハンドボールを経験したことがある学生が、ハンドボールの授業を受けて勉強になった技能として最も多かった回答は「ドリブル」である。ハンドボールにおけるドリブルはバスケットボールと異なった制約があるものの、授業のみでハンドボールを経験した学生でさえ、その正しい知識を知らないままハンドボールを経験し続けていたということである。

次にハンドボール未経験者は、ハンドボールにお

ける技能で最も習得が難しかった技は「ランニングシュート」であった。これまで、ドッジボールなどではステップシュートのような動作は行った経験があり、ジャンプシュートもイメージが湧きやすいようであったが、ランニングシュートの動作は他の競技でもなかなか経験することが少ない。しかし、ランニングシュートは相手のディフェンダーやゴールキーパーの対応の遅れを狙えるシュートであり、ランニングシュートのフェイクからジャンプシュートという技への発展も狙えるため、習得が必要な技能ともいえる。

また、ハンドボールを専門競技としている学生も正式な競技規則や技能の名称を認知しているわけではなかった。しかしながら、教員採用試験においてはどのような問題が出題されるかはわからない。いかに専門競技といえども、教員採用試験の合格を目指すためには、一からルール、技能を学習するということの必要性を再確認する機会となった。

筆者は講義内で、シュート練習の後、最終的にオフェンス2人対ディフェンダー1人にゴールキーパーを入れたシュート技術の指導にまで展開した。パス、ドリブル、シュートという個人的技能と集団の技能を活かし、得点を奪うことの楽しさは、ゴール型競技の魅力の1つといえるだろう。こうした技能の習得には、当然ながらハンドボールを指導するうえでの正しい知識と機会の提供が必要である。筆者としては、こうした指導者が増え、ハンドボールを生徒が実践し、ハンドボールの魅力がより多くの人に伝わることを願ってやまない。

引用および参考文献

- 1) 日本ハンドボール協会 (2013) 『日本ハンドボール協会創立75周年記念誌』 日本ハンドボール協会, pp. 18-19.
- 2) 日本ハンドボール協会 (2013) 『日本ハンドボール協会創立75周年記念誌』 日本ハンドボール協会, pp. 22-24.
- 3) 土井秀和 (2006) 『新学習指導要領による中学校体育の授業 (下)』 「ハンドボールの授業」 大修館書店, pp. 66-87.
- 4) 令和元年度 (公財) 全国高等学校体育連盟 (2020) 加盟・登録状況【全日制+定通制】 https://www.zen-koutairen.com/f_regist.html
- 5) 公益財団法人日本中学校体育連盟 (2020) 令和元年度加盟校調査集計 <http://njpa.sakura.ne.jp/kamei.html>
- 6) 日本ハンドボール協会 (2020) 「魅力・特徴編」 <https://www.youtube.com/watch?v=HCAJP1SKFSM>
- 7) 日本ハンドボール協会 (2020) 「ルール入門編」 <https://www.youtube.com/watch?v=fch7Vs1E29w&t=52s>
- 8) 日本ハンドボール協会 (2020) 「ポジション編」 <https://www.youtube.com/watch?v=G3PWL5z1qIc&t=36s>
- 9) 日本ハンドボール協会 (2020) 「ルール上級編」 <https://www.youtube.com/watch?v=ADED8hxao50&t=93s>
- 10) 資格試験研究会 (2019) 『2021年度版 教員採用試験 中高保健体育らくらくマスター』 実務教育出版, pp. 92-93.
- 11) 東京アカデミー (2019) 『2021年度 教員採用試験対策 オープンセサミシリーズ ステップアップ問題集⑧ 専門教科 中学・高校 保健体育』 ティーエーネットワーク, pp. 116-118.
- 12) 日本ハンドボール (2020) 『ハンドボール競技規則2020年版』 pp. 22-23.
- 13) 宮崎大輔 (2011) 『ハンドボールパーフェクトマスター』 新星出版社, pp. 54-55.
- 14) 細江文利監修 (2018) 『図説 新中学校体育実技』 大日本図書, pp. 128-141.
- 15) 佐伯年詩雄ほか編 (2018) 『中学体育実技』 学研教育みらい, pp. 130-147.
- 16) 的場益雄 (1959) 『ハンドボール』 不昧堂書店, pp. 46-49.
- 17) 的場益雄 (1966) 『ハンドボール』 不昧堂書店, pp. 28-29.
- 18) 日本ハンドボール (2020) 『ハンドボール競技規則2020年版』 pp. 50-51.
- 19) 日本ハンドボール (2020) 『ハンドボール競技規則2020年版』 pp. 22-23.
- 20) 日本バスケットボール協会 (2018) 『バスケットボール競技規則2018』 p. 170.
- 21) スポーツイベント・ハンドボール編集部 (2014) 『ハンドボール 目からウロコのシュート術』 グローバル教育出版, pp. 16-17.
- 22) 酒巻清治監修 (2012) 『ハンドボール練習メニュー200: 基本が身につく』 池田書店, p. 41.